

いつもありがとう

第10回作文コンクール 入賞作品集 2016

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／崎村忠士／白石収



シナネングループって何の会社？

私たちの生活のとなりに、
シナネングループがいます

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネングループが、どんな仕事をしているのかわかりますか。実は、シナネングループの扱っている様々な製品は、私たちの生活のなかで、なくてはならないものとして役立っています。生活のそばに、シナネングループを紹介します。



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業

[シナネングループ]
シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ
ミライフ東日本 日高都市ガス シナネン シナネンサイクル
シナネンゼオミック 品川開発 ミノス



シナネンホールディングス株式会社 東京都港区海岸一丁目4番22号

ありがとう 作文 [検索](#)

第10回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2016) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

崎村 忠士(シナネンホールディングス株式会社)

白石 収(朝日小学生新聞)

〈高学年の部3編〉

大好きなお母さん……………18

ひまわりの絵はがき……………20

家族のつながり……………22

江田 苑未……………18

佐藤 陽真里……………20

齋藤 龍太……………22

最優秀賞

てんしのいもうと……………4

シナネン賞

色白親子……………6

ミライフ賞

ぼくのおとうさん……………8

朝日小学生新聞賞

父との五十キロ……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

母の心……………12

お父さんのプラスの言葉……………14

いつもありがとう……………16

団体賞(9団体)

- 【福島県】 郡山市立緑ヶ丘第一小学校
- 【栃木県】 宇都宮市立白沢小学校
- 【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校
- 【愛知県】 扶桑町立柏森小学校
- 【京都府】 向日市立第二向阳小学校
- 【大阪府】 大阪市立島屋小学校
- 【広島県】 福山市立金江小学校
- 【徳島県】 徳島市加茂名南小学校
- 【宮崎県】 都城市立西小学校

主催…朝日小学生新聞社
 共催…シナネングループ
 後援…文部科学省 朝日新聞社
 ●応募総数三九、九三八作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ「作家」

「いつもありがとう」作文コンクールに応募された作文を読ませていただき、日本の家族の関係、親と子の関係はこんなにもあったかいんだと思ひ知ることができて、ほっとしました。作文の中にひいおばあちゃんがよくでてきました。ひいおばあちゃんから、いろんなものを若い子どもたちが受け取っていく流れにも勇気づけられました。

森田 正光 「気象予報士」

このコンクールも歴史を積み重ね、みなさんの作品のレベルというか、文章力がアップしたような気がします。体験の特異さよりも、子どもたちが書いた文章のうまさによって感動をしました。コンクールの審査をしていると家族全体の様子が見えてくるので、読ませていただいております。審査員冥利につきます。

小島 奈津子 「フリーアナウンサー」

まず、この審査に携わらせていただき感謝しています。どうも「ありがとう」です。作文の中に、家計を担う働くお母さんがたくさんでてきました。それを

子どもが見てうけとめてしっかり文章にできているところがすごいと思いました。働いている姿をきちんと見せていくのは大切なことなんだと感じました。

崎村 忠士 「シナネンホールディングス株式会社」

審査させていただくのは5回目ですが、すばらしい作品が多く、毎回、選ばれなかった子どもにも申し訳ないと感じます。今、子どもの世界ではいじめの問題だとか、大人の世界では心の病気とかいろいろな問題がありますが、このすばらしい作品を子どもだけでではなく、是非大人にも読んでもらいたいと思います。

白石 収 「朝日小学生新聞」

「ありがとう」の反対は？ こんな書き出しにドキッとしました。答えは「当たり前」だと作文に登場するお母さんが教えてくれたそうです。ごはんを作ってもらうこと、洗濯、おこづかいをもらうのは当たり前、そう思っていますか？ 周りの人の支えが当たり前でないことに気付く、すばらしい作文コンクールだと改めて思いました。

(順不同敬称略)

てんしのいもうと

松橋 一太

ぼくには、てんしのいもうとがいます。

よなか、ぼくは、おとうさんとびょういんのまちあいしつにすわっていました。となりにいるおとうさんは、すこしこわいかおをしています。いつも人でいっぱいびょういんは、よなかになるとこんなにしずかなんだなあとおもいました。

すこしたってから、めのまえのドアがあいて、くるまいすにのったおかあさんとかんごしさんがでてきました。

ぼくがくるまいすをおすと、おかあさんはかなしそうに、はをくいしばったかおをして、ぼくのてをぎゅつとにぎりました。

いえにつくころ、おそらはすこしあかるくなっていました。

ぼくは一人っこのなので、いもうとがうまれてくることごとめたのしみでした。おかあさんのおなかにいもうとがきたときいてから、まいにち、ぬいぐるみでおむつがえのれんしゅうをしたり、いもうとのなまえをかんがえたりしてすごしました。

ごはんをたべたり、おしゃべりしたりわらったり、こうえんであそんだり、テレビをみたり、いままで三人でしていたことを、これからは四人でするんだなあとおもっていました。でも、はるやすみのおわり、トイレでぐったりしながらないているおかあさんを見て、

これからも三人なのかもしれないとおもいました。さみしくて、かなしかったけど、それをいったらおとうさんとおかあさんがこまるとおもっていえませんでした。

ぼかぼかのあたたかいひ、ぼくたちは、ぜんこうじさんへいききました。いもうととバイするためです。はじめて四人でおでかけをしました。

ぼくは、いもうとがてんごくであそべるように、おりがみでおもちゃをつくりました。「また、おかあさんのおなかにきてね。こんどはうまれてきて、いっしょにいろんなことしようね。」

と、てがみをかきました。

ぼくは、てをあわせながら、ぼくのあたりまえのまいにちは、ありがとうのまいにちなんだとおもいました。

おとうさんとおかあさんがいることも、わらうことも、たべることやはなすことも、ぜんぶありがとうなんだとおもいました。

それをおしえてくれたのは、いもうとです。

ぼくのいもうと、ありがとう。

おとうさん、おかあさん、ありがとう。

いきていること、ありがとう。

ぼくには、てんしのいもうとがいます。

だいじなだいじないもうとがいます。

色白親子

三宅 礼華

私は、お母さんゆずりの色白です。夏に学校でプールにいどうしている時、いきなり仲のいい友だち三人に、

「あやちゃんゆうれい。色が白いからゆうれい。」

と笑いながら言われました。私は、いきなり言われたのでびっくりして、何も言えませんでした。いつも色白のことをお母さんから、

「色白美人でかわいいね。」

とやさしく言われるとうれしいけど、友だちから、色が白いからゆうれいと言われると、なぜかかなしい気持ちになりました。

次の日に学童で同じ友だちから

「ゆうれいごっこしよう。あやちゃんゆうれいやく。」

と言われて私は、前に言われたときよりかなしくなりました。私は、

「ちがうあそびをしよう。」

と言ったら、

「じゃあ、おにごっこでおにじゃなくてゆうれいがおいかけごっこをしよう。」
と言われたので

「だれがゆうれいやくなん。」

ときいたら

「あやちゃん。」

と言われました。でも、ちがう遊びにしてもぜったい私がゆうれいになるのでその遊びの輪からぬけました。それから、少しでもやけるようにぼうしをかぶらなかつたり、外で遊ぶようにしたけど、手や足ばかり茶色になって、顔はあまりやけませんでした。

しばらくして、お母さんに友だちからゆうれいと言われたことを言うと、お母さんは、

「ゆうれいと言われるのは、美人と言われるのと同じだよ。むかしのゆうれいも雪女も色白美人でしょ。お母さんも色白だったから、おばあちゃんから『色白は七難かくす』って言われたんだよ。」

と言っただっこしてくれました。私は、うれしすぎて、てれてしまいました。それからゆうれいは美人と思うようになりました。その後も、ゆうれいと言われることがあっても、いやな気持ちになりませんでした。

一つの言葉を聞いても、聞く人の考え方によっていいように感じたり、悪く感じたりします。これからは、いやなことを言われても、いいように考えるようにすると気持ちが楽になることをお母さんに教わりました。物をもらつたりするのもうれしいけど、形にはない考え方や思いやりを教えてください。これからの幸せにつながると思っています。幸せになる方法を教えてください。色白のお母さん。

評価のポイント

自分にはこりを持つことを教えるお母さんをきちんと書くことができている。

ぼくのおとうさん

植木 舞旺

ぼくのおとうさんは、あせくさいひとです。ぼくはさんにんかぞくです。おとうさんがおしごとのひは、かぞくでいちばんさいごにかえってきます。おとうさんがかえってくるど、おとうさんのおいがします。

おとうさんがおしごとがおやすみのひは、さかなつりにつれていってくれたり、むしとりにつれていってくれます。ぼくはいきものがだいすきなので、おとうさんはいっしょうけんめいに、つりかたやむしとりをおしえてくれます。ぼくは、そのじかんがとでもたのしいです。ぼくがじぶんでさかなをつれたときは、いつもおとうさんが、

「すごいじゃん。おもしろいだろう。」

といて、いっしょによるこんでくれます。そのわらったおとうさんのかおは、あせでぬれていました。ぼくもおとうさんも、あせでびっしょりです。

あそびにむちゆうになって、いえへかえるのをわすれていると、おとうさんのけいたいでんわがなります。ぼくはすぐに、おかあさんからのれんらくだなとおもいました。

「いま、かえるよ。」

と、でんわをきったおとうさんは、

「しかたない。かえろう。」

といて、いえへかえります。あそびにいくときはあるくのがはやいのに、かえるときはゆっくりてをつないであるきます。

いえについて、こえをそろえて、

「ただいま。」

というど、

「はやく、てあしをあらってきて。」

と、ぼくのおかあさんはいつもいやそうなかおをしています。でも、きれいにしてからへやにはいると、

「おかえり。たのしかった。」

と、ぼくのはなしをきいてくれます。

ぼくのおとうさんは、あせくさいひとです。ぼくのおとうさんは、いつもおそくまで、ぼくとおかあさんのためにがんばってしごとをしているから、あせくさいのです。そして、やすみのひには、ぼくとたくさんあそんでくれるから、あせくさいのです。ぼくは、そんなおとうさんがだいすきです。

「おとうさん、いつもありがとう。また、いっしょにつりにいこうね。」

評価のポイント

お父さんとの触れ合いを通じて、子どもらしい素直な感謝の気持ちが出てくる。

父との五十キロ

吉元美羽

「治なをしてあげることこともも大事だいじなことだけど、最期さいごを見送みおくるのも大事だいじなんだよ。」
そう言いって、父ちちは今日けふも帰かえって行いった。

五十キロメートル。これは、わたしと父ちちのきよりだ。病院びやういんで働はたらく父ちちは、きり島市しましに一人ひとりで住すんでいる。毎日まいにち一キロメートルを歩あいて通学つうがくするわたしにとっては、父ちちのきよりは、二十五日にじゅうごにち分に当あたる。同じ鹿児島県かごしまけんでもわたしにはなかなか会いに行いけないきよりだ。

そんな父ちちとの一いち番ばんの楽たのしみは、二人ふたりで行いくえい画館がくかんだ。ポップコーンやジュースを買かいこんで二人ふたりで笑わらいながらえい画がを見る。六人家族ろくじんかぞくのわたしにとって、父ちちと二人ふたりきりになれるゆい一の時間じかんなのだ。もちろん、兄あにたちもわたしに負まけないくらい父ちちのことが好きだ。ふだんは自分の部屋ぶつぐらにこもっているが、父ちちが家に帰かえってきて、ちゆう車場しやうじやうばに車を止とめていると、ダダダッと階段かいでんをおりてくる。そして、リビングには家族かぞくみんなが集あうのだ。

父ちちはわたしたちが小さかったころ、めがねをかけたトトロのようだった。父ちちの大きなおなかの上うへで、トトロのめいちゃんのように顔かほをうずめるのが大好きだった。しかし、今は仕事しごとが忙いそしくなり、やせていった。すっかりつかれていてつらそうだ。父ちちが、
「やつと今いま昼ひるご飯ごはんを食たべられたよ。」

と言いうときには、もうすっかり夜よるなのだ。ドクターヘリを特集とくしゆうしているテレビを見ていたとき、父ちちはこんなことも言いっていた。

「パパはり島しまに行くとき、ヘリで一時間いちじかんも乗のっているよ。天気てんきの悪いわるいときは、このまま落おちたら見みつけてもらえないかもな。お前まえたちにももう会あえないのかなと思うときがある。」

それを聞いたとき、父ちちの仕事しごとは思おもっていた以上いじょうにもっと大変たいへんなんだと思おもった。

家いえでの父ちちは、ひたすらグーグーねている。でも、電話でんわが鳴なると飛び起ときる。テレビの音おとは急いそいで消けされ、兄あにたちに「シーッ」と合あ図ずを送おくる。わたしはこのとき父ちちはもう帰かえってしまふのかとドキドキする。父ちちはいつだって仕事しごとをしているのだ。

父ちちとわたしわたしのきよりは五十キロ。もちろんさびしいし、いつも一緒にいたい。しかし、ドクターヘリに乗のって命いのちを救すくいにく父ちちの姿すがたは、かん者かんじやさんにとってヒーローにちがいない。いつも大変たいへんな仕事しごとをこなしながらも、わたしたち家族かぞくのためにがんばっている父ちちは、わたしたちのヒーローでもあるのだ。

父ちちの休日きゅうじつも終わりが近づき、夜よるおそくにきり島しまへ帰かえるときがきた。いつもならとづくに眠ねっている時間じかんだが、わたしは、母ははに内うちしよで、こっそりベランダから見送みおくりをして

いる。
「気きをつけてねパパ。お仕事しごとがんばってね。次つぎ帰かえってくるのを楽たのしみにしてるね。」

家族かぞくのため、かん者かんじやさんのためにがんばっている父ちちに「ありがとう」をこめて、おもいつきり手てをふっている。

評価のポイント

50キロメートルと距離きょりを出すことで、心こころは近いことを引き立たせている。

母の心

濱田 心希

春休みの事だった。家の近くの駅まで、母と二人で歩いていた。信号待ちをしていると、しらがが生えていて足が不自由なのかつえをついて重たそうに物をもったおばあさんが、先に信号待ちをしていた。青になったのでわたってわたっていると、母は横だんほ道をひき返し、おばあさんの元へかけよった。

「しん号が点めつしているの、お手伝いしましょうか。」

と、声をかけた。びっくりした。母が後ろを見ていたなんて。おばあさんが言った。

「いいのよ。」

母は、

「いいんです、さあ、お持ちするので行きましょう。」

と、おおうような温かい手でやさしく引っぱって、ぎりぎり信号をわたった。

「ありがとうね。」

と、お礼の言葉を言われた。

「お役に立ててよかったです。」

と、母は言いおばあさんはまたゆっくり歩いて行った。母に聞いた。

「なんでさつきはおばあさんがこまっているのに気が付いたの？」

「なんでかって？それは、ママには後ろにも目がついているからよ。」

と、わらいながら言った。その言葉にドキッとしてしまった。その後、母のような人になりたいと思った。わたしの母は、病気の人の家をまわる「ざいたくかんご」という仕事をしている。なので、仕事に行く時は、

「助けに行ってくるね。」

と、言い出かける。母がわたしに話してくれた事がある。

「お母さんの仕事は、家の人や本人が大丈夫と言っても、表じょうや声のトーンなど色いろ見ではんだんするの。」

と。本当に目がついていたらこわいなと思うが、それくらい見ないとだめなのかなと思つた。お母さん、人のためにせいっぱいつくせることを教えてくれてありがとう。わたしの名前の由来は心やさしく自らこころざしを持ち人のために力をつくせる希望をあたえられる人に育つようにつけられた。だから、お母さんのようになるため、がんばります。さい近は、反発ばかりするけど、お母さんの子どもに生まれて来てよかつたよ。こんなわたしに希望があふれる名前をつけてくれて本当にありがとう。

お父さんのプラスの言葉

福森 絢斗

「カキーン」

プロ野球うじゃやないから、こんな音はしなかったけれど、ぼくのおもちやのバットにボールが当たった時のことをおぼえています。

お父さんが、バットのもち方から、ていねいに教えてくれました。バットをもつ時は両手をくつつけること、バットをふる時はボールをよく見ること、足の重心を動かすこと。ボールを一きゆう一きゆうなげるたびに、アドバイスをくれました。でも、なかなかバットに当たらないので、イライラしてき当にバットをふってしまいます。するとよけいにボールをうつことができませぬ。

「イライラしても、ボールは当たらんよ。」

お父さんは、落ちついて言ってくれました。一回しんききゆうをして、しっかりかまえます。すると、いい音がして、バットをもっていたぼくの手は、ジーンとしてビリビリというかんしよくがありました。これが、ボールをうったということなんだと、とてもいい気もちになりました。お父さんも、

「よし、いいぞ。」

と、え顔でよろこんでくれているのが分かりました。それから、何回もボールをうてるようになり、公園のはしまでボールがとんだ時は、

「すごい、すごい。」

とほめてくれました。ぼくは、うれしい気もちでいっぱい、たくさんボールをうてるようになりたいと思いました。

また、キャッチボールのれんしゆうでもいいボールをなげるとかならずお父さんは、

「ナイスボール。」

と言ってくれます。お父さんからほめられると、やっぱりぼくはえ顔でうれしくなります。

ぼくは、大きくなったらマッサージしになりたいです。たくさん人のつかれをとってあげて、気もちよくなってもらいたいからです。しごとでつかれているお父さんにも、マッサージをしてあげます。こしがいたいとよく言っているお父さんには、こしの所を力を入れて、ていねいにマッサージをします。足のうらをふんだりもします。

「あー、気もちいいな。ありがとう。」

そう言ってくれるので、うれしくてぼくはもつと気もちよくしたいなと思います。

平日は、し事をがんばっているお父さん。休みの日は、野きゆうをしたり、べん強をおしえてくれたりするお父さん。お父さんに、ほめてもらえるとぼくはとてもうれしくなって、つきもがんばろうと思います。そんなたくさんのプラスの言葉をくれるお父さんに、ぼくもたくさん、ありがとうの気もちをつたえたいです。

お父さん、いつもありがとう。大すぎです。

いつもありがとう

大鳥 秀高

ぼくは、朝起きるのがすごくすごく苦手です。ぼくが目覚ましは二台あります。その目覚ましは時計屋で一番音が大きいものを小学校に入学するときにお父さんが買ってくれました。その大きな音は、家の外まで聞こえるほどです。しかし、ぼくは全く聞こえません。あまりにも目覚ましの音がうるさいので、お父さんがやさしく起こしにきてくれます。でも、まだぼくは起きません。二回か三回お父さんはやさしく起こしてくれれます。しかし、まだぼくは寝たままなので、たまりかねて今度はお母さんがやってきます。そして、お母さんがかいじゅうのような大きな声で、

「起きろ！」「いつまで寝てるのあんたは！」

とどなります。でも、まだまだぼくは起きません。困り果ててお母さんは最後の必殺技をくり出します。それは、お母さんの全体重をかけた柔道の寝技です。ぼくがどんなに逃げようとしても、おさえこんで離しません。

「助けて！」「もう起きるから助けて！」

ぼくは一瞬にして目が覚めます。いつも根気よく起こしてくれてありがとう。もうすこし早く起きるようにするから。

大好きなお母さん

江田 苑未

「ありがとうの反対言葉は？」とお母さんに聞かれました。反対言葉の遊びをしている時でした。「高い」の反対は「低い」、「右」は「左」などと当てっこして遊んでいた。

「ありがとう？」「なんだろう？」「ありがとうくない」から「めんどう」かな、なんかちがう気がしました。

お母さんは今でも、宿題をみてくれます。仕事をいっぱいやって、いそがしいはずなのにいろいろしてくれます。ゲームや料理もそうだ。いっぱいやっているのにもっとやってくれようとする。

お出かけするときも、ぎりぎりまでかたづけしたり、もつていくのみ物やおやつ、かさのじゅんぴおしぼり、ぼう子などもしものためにいつもおそくなり荷物も多くなる。みんなのわすれ物をかくにんして自分のスマホをわすれたりします。

学校に行く時もわすれ物がないかうるさいほど言われます。「もう言わないでよ」と思うこともある。「行ってきます」した後も、水とうやハンカチをもつて追いかけてきます。

いつもいっぱい私たちにしてくれようと思います。おとうさんやお姉ちゃんにもしてあげています。いつも私たちのために一生けん命きつと仕事もこなふうにしているんだろう。

いつもわらっている。失敗してもわらってとてもおもしろい。晴れの日のお出かけの時かさなんかもつてきて雨なんかふらないし、じゃまだと思う。でも時々ふってきて、その時はとても助かる。

みんながねた後に後かたづけやあらい物をいつもやってくれます。つかれて休みの日はいつまでもねている。

「ありがとう」の反対言葉は「あたりまえ」だと、お母さんがおしえてくれた。「えっ？」そうかあと考えてみた。お母さんが私にしてくれていること「親なんだから、あたりまえ」考えました。「お母さんありがとう」と考えるとあの時やってくれたことがもつと「ありがとう」になりました。水とうをもつて追っかけてきてくれた時に「もういらぬ」と言うことがありました。お母さんがやっていることはあたりまえと考えるとそう言ってしまう。ありがとうと考えるとそんなことは言わない。

本当だ。ありがとうの反対はあたりまえ。すごいお母さんと思った。

「同じ出来事でも、ありがとうと思うと有するものがたくさんふえてくる。あたりまえと思うとないもの、ふまんがたくさんふえてくる。ありがとうと思う方が得だよ。」と教えてくれた。考えてみた、そうだと思った。

だからお母さんの周りには、ありがとうがたくさんあることが分かりました。言葉ってふしぎな力がある。大好きなお母さん。

ひまわりの絵はがき

佐藤 陽真里

「おはよう！」

今日も事故やけがをせず、元気に登校することができた。それは、曾祖母の三枚の絵はがきのおかげだと思ふ。

夏休みになると、毎年母の実家がある田舎で大半を過ごす。実家に到着する手前で、まず一番最初に曾祖母に会いに行く。「ただいま、ばあちゃん。帰ってきたよ。」私が生まれたばかりのころ、曾祖母は母と一緒にミルクをつくってくれ、よく歌を歌ってあやしてくれていたらしく、小さい時からずっと大好きな人だ。

ある日、曾祖母が母の実家まで歩いて来た。曾祖母は、少し息切れしながら私に二枚の絵はがきを手渡してくれた。そのはがきには、曾祖母が描いた花びんに入ったお花の絵が描いてあった。私は、その絵がすぐに気に入った。そして、もう一枚「何か絵をかいて」と、曾祖母に紙を渡した。色えん筆をにぎると、「陽真里だからひまわり。」と言ってかわいらしいひまわりの絵を描いてくれた。母の実家と曾祖母の家の間には長い坂があり、息切れして来て

いたことを思い出し、「ばあちゃん、送るよ。」と言って、右うでは私が、左うでは弟が転ばないように両うでを支えて、気をつけながら、ゆっくりと二人で横に並んで送っていった。曾祖母は、「私はなんて幸せなんだろう。こんなに優しいひ孫がいて。ありがとうね。」と言って、ニコツと笑ってくれた。そのありがとうねの言葉はとてもあたたかくて、ありがとうという言葉がこんなにも心にしみたのは初めてだった。

この時からその絵はがきは、私のランドセルのポケットにお守りとしてしまっている。そのお守りの効果はとても良くて、毎日元気に登校して友達に会うことができる。ランドセルを開けるたびに「ありがとうね。」と心でつぶやく。

そして今年もまた、夏休みがやってきた。楽しみにしていた田舎へ行く。「ただいま、ばあちゃん。帰ってきたよ。」

いつもの夏休みとはちがう。今年はニコツとしている曾祖母の写真に向かい話しかける。

「あらまあ、よく来たね。つかれたでしょ。」と話しかけてきそうさ。

「ばあちゃん、いつもありがとうね。」

そう言ってお仏さんの前で手を合わせる。家の中には、線香の香りがした。

家族のつながり

齋藤 龍太

『神様に感謝だね。』

この言葉の意味を知った時、ぼくはこの家に生まれて来て良かったと思いました。

ぼくは、四年生の終わり頃から目の前が暗くなったり、めまいがしてフラフラしておれてしまう病気になる、今もその病気と戦っています。そのため、多くの人達に心配をかけたり、助けてもらったりしています。でも、その事で一番苦しい思いをしているのは、お母さんでした。たおれてしまう原因がわからず、いろんなお医者さんに行きました。ぼくは自分の事しか考えていなくて、お母さんの心が悲鳴を上げている事には全く気がつきませんでした。

ある日、ぼくはお父さんと一緒にお風呂に入っていると

「お母さんには優しくしような。泣いてるぞ。」

と、お父さんに言われたのです。なかなか病気が治らない事にイライラすると、そのたびお母さんにやつあたりをしていました。二人共、大きな声を出して気持ちをおつけ合った事は数えきれません。そんな時でも、

「なんでも考え方ひとつだよ。悪く思えばそうなるし、良く思えばどんどん良い方向に

進むから。心配ない。ない。」

と、笑って言ってくれていたもので、まさか泣いていたなんて思ってもいませんでした。いつもニコニコと笑っていたり、ジョーダンを言うお母さんが泣いているとは、ぼくは考えもしていませんでしたが、それはお母さんの精一杯の強がりと優しさだ。とお父さんから聞かされました。眠れない日が何日もあったということも聞きました。

何日かして、三人で散歩に行くと、お母さんは

「この時間が最高に幸せ。神様に感謝だね。」

と言ったのです。なんで神様に感謝なんだろう。病気をして、いい事なんてひとつもないこの状況なのにどうしてなのか、お母さんに聞いてみました。ぼくぐらいの年になると、親と出かけるのをイヤがったり、あまり会話もしなくなったりする子供さんが増えているけれど、

「病気と戦うことによって親子の大切な時間をたくさん頂いているから。」

と言ったのです。お母さんは、悪くは受け止めず、いつも前向きに考えます。この事は、ぼくの大きな力にもなっています。ぼくが病気になった事でお母さんの弱さも知り、そのお母さんをいつもそばで支えてくれていたお父さんの強さも知ることができて、マイナスだけじゃなく、家族のつながりと思いやりを強く感じる事ができました。みんなに言いたい事です。ぼくには、こんなに素敵な家族がいることを。

「ありがとう。」